

幼児の読書による自然体験の再認識の効果

小林 宏菜

幼児期の発達に有意義な体験の1つとして自然体験があげられる。自然体験とは自然と触れ合う体験のことであり、さまざまな体験内容が含まれる。幼児にとって身近であり親しみやすいものとしては動物との接触体験がある。また、幼児は絵本を読むことを通して、新しい知識を増やすだけでなく、これまでに体験したことを絵本のなかで再認識することができる。幼児が実体験したことを絵本の中で見つけることにより、その体験についての理解が深まることが期待される。このような期待から自然体験に関連した絵本の読み聞かせを行っている保育施設も見られるが、その効果は実証的に検討されていない。

そこで、本研究では、以下の点を検討することを目的とした。目的1では、ある動物の登場する絵本を読むことにより、その動物と関わる意欲が高まるか（仮説1-1 ある動物の登場する絵本を読んだ幼児のほうがその動物が登場しない絵本を読んだ幼児よりもその動物と関わる意欲が高まる）、その動物への理解が深まるか（仮説1-2 ある動物の登場する絵本を読んだ幼児のほうがその動物が登場しない絵本を読んだ幼児よりもその動物への理解が深まる）を検討した。目的2では、ある動物との接触体験をした上で、絵本を読んでこの体験を再認識することにより、その動物と関わる意欲が高まるか（仮説2-1 ある動物との接触体験をした上でその動物の登場する絵本を読んだ幼児のほうがその動物の登場しない絵本を読んだ幼児よりもその動物と関わる意欲が高まる）、その動物への理解が深まるか（仮説2-2 ある動物との接触体験をした上でその動物の登場する絵本を読んだ幼児のほうがその動物の登場しない絵本を読んだ幼児よりもその動物への理解が深まる）を検討した。

動物との接触の有無と動物の絵本の有無の2つの要因によって幼児を4群に分け、動物への理解や動物と関わる意欲などを測定した。被験者はつくば市、土浦市内の保育園に通う4~5歳児であり、56名（男児22名、女児34名、平均月齢62.36か月）を分析対象とした。動物との接触の有無と動物の絵本の有無の2つの要因のいずれも対象とした動物はウサギとイヌの2種類であった。なお、幼児が普段どのような生き物と接触しているかについて、保育施設へ飼育動物や幼児の接触状況を尋ねた。幼児への実験では、動物への印象や理解を測定する面接を行った後、動物の登場する絵本の読み聞かせを行った。その後、再び面接で同じ質問項目について尋ね、絵本の読み聞かせ前後での変化を測定した。

読み聞かせ前後の面接での動物と関わる意欲や動物への理解の差得点について、幼児の動物との接触と絵本の読み聞かせの有無によって2要因の分散分析を行い、動物との接触や絵本の影響について検討した。主な結果は以下の通りである。

- 1)イヌ（幼児の接触時間が長い動物）に接触しており、イヌの絵本（内容が詳しいもの）を読んだ場合に、絵本がその動物への理解を深めることが示されたため、仮説1-2は部分的に支持された。
- 2)ウサギやイヌの登場する絵本を読むことにより、これらの動物と関わる意欲は高まらなかった。また、ウサギやイヌとの接触体験をした上で、その動物の絵本を読むこと（体験の再認識）によりその動物と関わる意欲が高まる、理解が深まるという結果は示されなかった。したがって、仮説1-1、仮説2-1、仮説2-2はいずれも支持されなかった。今後は、被験者数を増やすことや、長期的な幼児の変化を検討することが望まれる。

（指導教員 鈴木佳苗）